

平城宮土器大別の検討(2)

—前半期SD3035 出土土器を中心に—

1 はじめに

平城宮跡出土土器の研究についてはその大別を含め検討の段階にあることを指摘すると共に、最初の作業として東院SD8600出土土器をとりあげ分析をおこなった(『紀要2008』)。検討に際しては個々の土器群についての具体的な実態把握と類例の蓄積が急務と考え、宮内出土土器について逐次作業を進めている。今回は1965年と1993年に調査され、具体的資料提示のないままに平城Ⅱの標式資料と位置づけられた溝SD3035出土土器をとりあげる。

2 溝SD3035出土土器の実態

遺構と層序 平城宮の東張出し部の北半西寄りには、宮内省被官の一つである造酒司が置かれたことが明らかになっている(『平城宮木簡二 解説』1975)。SD3035は造酒司の井戸の一つSE3046から南への排水溝で幅は0.7~0.8mであるが、一部は幅広い水溜施設となってる(『年報1965』)。水溜部は南北約7.5m、東西約4.5m、深さ約0.4mの規模である。堆積層は上から順に黒色砂、暗褐色砂、有機質を多く含む黒色土、灰褐色砂の4層となる。土器は各層から出土しているが、特に下層の厚さ0.2m前後の灰褐色砂層からは質・量ともに良好な状態で出土し、今回の検討対象とした。なお、第3層からは神亀元年、第4層からは霊亀2・3年(716・717)、養老2年(718)の紀年木簡が出土し、おおよその年代が推定できる。

出土土器 土師器と須恵器がある。焼き物の種類や器種を問わず完形もしくは大片に復元できることから、土器の大半は一括投棄された可能性が高い。

口縁部を中心とした出土点数は200点以上となる。出土量の70%以上を土師器が占め、器種別では食器類が80%以上となり、従来から指摘されてきた宮内出土土器の様相とほぼ一致する。土師器の主要食器である杯A・B・C、皿Aの出土点数は各々9・6・65・8点となり、杯Cの出土量が多い反面、杯BI、高杯AI、鉢、盤、壺Aなどの器種を欠いている。須恵器は杯A15点、杯B6点、甕10点があり、なかでも杯Aでは口縁部と底部の境界の不明瞭な丸底状の杯Aや播磨、和泉、尾張、美濃など各地で生産された大小の甕類の出土比率が高い。造酒司で

使用された土器群の特徴として醸造・貯蔵用の須恵器甕に加え、土師器杯Cや須恵器丸底杯Aのように液体用器種の出土量が多いことを指摘できる。

土師器のうち杯A・Cの特徴をまとめると以下のように要約できる。

法 量 杯AではSD8600堆積層出土土器に見られた口径13cm未満の杯AⅢはなく、口径15cm前後、17cm前後、18cm以上の3種となる可能性がある(表2)。杯Cも同様に口径13cm未満のCⅢはなく、口径13~14cmと口径15.8~20cmのグループがあり、なかでも口径17cm前後のものが出土量の主体となる^{注)}。

調整手法 杯A・Cともに暗文土器と無暗文土器の二者がある。暗文土器は、杯A・Cともに底部にヘラケズリ、口縁部にミガキ調整を加えるb1手法が主体となるが、無暗文の杯Cの調整は基本的にa0手法である。杯Aの口縁部内面の暗文構成には、①二段放射暗文、②一段放射+連弧暗文、③一段放射暗文の3種があり、暗文構成①は1点のみで主体となるのは暗文構成②である。杯Cは②と③がほぼ等量あり、杯A・CともSD8600例と同様に単一の暗文構成で統一されるものではない。

群 別 細部の形態、暗文を含めた調整手法、胎土、色調などの点において共通する特徴があり、いくつかのグループとして把握できる。その場合、甕を含め比較的数量多くの器種を含むグループと限定された器種のグループがある。A(3・7・11)・B(9・10)群は従来のI・II群に近いものである。C群(1・5)は褐色を呈し、胎土に白色粒子や雲母を多く含むもので、丁寧なヘラケズリを特徴とする。D群(4・8)は口縁内端部が小さく丸く肥厚し、その直下が沈線状になるもので、内底面は細かい単位の多重螺旋暗文となる。E群(2・6)は無暗文土器で口縁端部内面が内湾するものである。F群(12)はa0手法で調整し、胎土に大きな粒子の砂粒を含むもので、砂粒は器表面に現れる。このほかに、外面に丁寧なヘラミガキを施す杯Eのグループや口縁部下半から底部にかけて全面にヘラケズリを施す鉢Hのグループがある。

3 平城Ⅰの検討

SD3035出土土器の実態が明らかになったことによって、先に分析を行ったSD8600出土土器との比較検討が可能となった。先述したようにSD3035出土の杯A・Cの

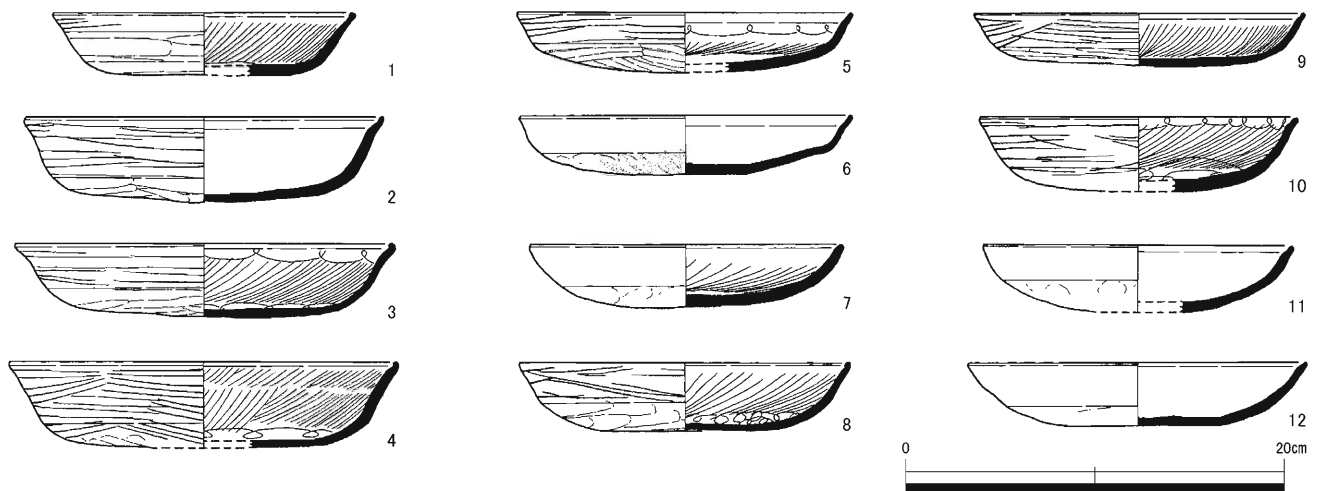


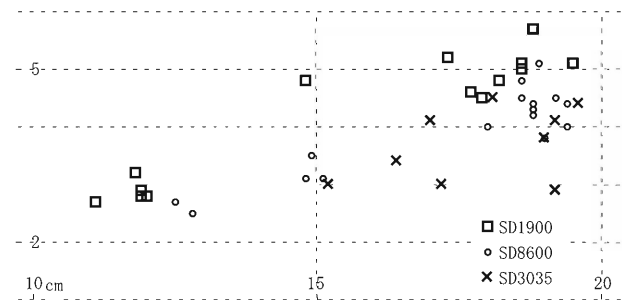
図35 SD3035下層出土土器 (1~4: 杯A、5~12: 杯C) 1:4

法量分化はSD8600とは明らかに異なり、新たな基準のもとに行われたことが予測される。暗文構成も杯Aでは①・②併行から②主体、杯Cでは②主体から②・③併行へと変化する。一方、SD8600出土土器と先行する朱雀門下層SD1900出土土器（『平城宮報告Ⅸ』）との比較では、土師器の杯類は杯A 3種、杯B 2種、杯C 3種で構成されることは従来の平城Ⅰと同じであるが、SD8600では器高は低下し、口径は拡大する傾向が認められる（表2）。また、土師器杯AI、杯CIに一段斜放射+連弧暗文のように新たな暗文構成が出現することはすでに指摘した（『紀要2008』）。さらに、杯Aの器種分化は、異なる種類の暗文構成をもつ土器群によって成立しているのである。

SD8600出土土器と同様の土器群は、平城宮では第一次大極殿院西方の溝SD12965下層（『1977平城概報』）、京では長屋王邸の溝SD4750、井戸SE4336・4770（『平城京左京三条二坊（長屋王邸）報告』）、薬師寺井戸SE037（『薬師寺発掘調査報告』）などからも出土しており特異なものではなく、むしろ造営期を含めた平城京遷都直後の一般的な土器様相と考えられる。「平城宮土器」の大別をはじめて提示した『平城宮報告Ⅶ』やその後一部について修正と資料の追加を行った『平城宮報告ⅩⅢ』では、いずれも平城Ⅰを飛鳥Ⅴの概念で捉えている。先述したようにSD8600出土土器と同様の内容をもつ土器群の実態は従来の平城Ⅰ（飛鳥Ⅴ）の範疇に収まるものではなく、新たな様式、すなわち、藤原宮の土器様式（飛鳥Ⅴ）を継承しながらも新たな展開を始めた土器群として評価でき、むしろこのような土器群を平城Ⅰとして規定すべきであろう。

時期については、平城宮の土器変遷のなかで位置づけるべきであるが、SD8600やSD4750出土の最新紀年木簡は和銅8年、霊亀2年であり、その他の遺構からは養老4年紀年木簡を最新としている。一方、SD3035出土の

表2 土師器杯A法量分布



紀年木簡は霊亀2年から養老2年である。土器様式の変遷には霊亀年間に一つの画期があり、養老年間中頃に新たな様式への移行が終了したと考えることも可能である。

4 おわりに

造酒司で使用されたSD3035下層出土の土師器は、SD8600出土土器に続く土器群であり、生産単位や生産地を反映したと考えられる8群以上のグループで構成されている。単に造酒司という製造部門に限られた現象である可能性もあるが、いずれにしても平城宮へ供給された土師器の生産地を解明するうえでの基準資料となる。

また、SD8600出土土器を含む平城宮遷都当初の土器群を新たに平城Ⅰと規定した。元来、平城京の各遺構から出土する土器は同時期であっても、均一な様相を示す例は少なく、しかも土器変遷は斬新的である。型式・様式設定の明確な基準を確定するうえでも、今後更なる類例の増加が待たれる。（川越俊一／客員研究員、西口壽生）

注

法量のばらつきは同一器種でも多少認められるが、特に、杯C・碗Aの法量分化は境界が不明瞭でばらつきが大きい傾向にある。基本的な要因としては、「写し」の見本となった重鏡などの金属容器に由来することや表2のSD3035杯A例が示すように各々の土器生産地での法量にたいする認識差などが想定される。